

[Discovery Days 活動報告]

Art&Books ギャラリートーク

はじまりの美学



ポーラ文化研究所は2024年5月15日、ポーラ青山ビルに「化粧文化ギャラリー」を開設。新たな活動のリスタートから想起し、「はじまり」をテーマに展示を企画、3期にわたって開催した。研究所設立まもない時期に収蔵した《橘唐草紋散蒔絵婚礼化粧道具》や、エジプト、ギリシアの黎明期の化粧道具、また人生のライフステージが変化するとき初めて行う化粧など、多彩な「はじまり」「起源」を紹介し、実際の作品を前に研究員が解説を行うギャラリートークを実施した。

展示「はじまりの美学」は以下を参照。

<https://www.cosmetic-culture.po-holdings.co.jp/gallery/artandbooks/2023/11/event001/>

<https://www.cosmetic-culture.po-holdings.co.jp/gallery/artandbooks/2024/09/event002/>

<https://www.cosmetic-culture.po-holdings.co.jp/gallery/artandbooks/2024/12/event003/>

なお展示作品は、ポーラ文化研究所ウェブサイト「デジタルミュージアム はじまりの美学」で公開している。

<https://www.cosmetic-culture.po-holdings.co.jp/digitalmuseum/beginning/>

1期 化粧文化研究のはじまり

〈Art（展示）〉ではポーラ文化研究所が設立初期に収集した《橘唐草紋散蒔絵婚礼化粧道具》の中から、お歯黒道具一式、鏡台と円鏡、刷毛や筆類などの化粧小物を取り上げた。

ポーラ文化研究所では、「化粧文化」の歴史的な探求にあたり、化粧道具や浮世絵などの絵画資料、

文献の収集を通じて、化粧法、化粧に向かう思いや行動の研究に着手した。今回展示した婚礼化粧道具はポーラ文化研究所を代表するコレクションのひとつで、活動開始の早い時期に収蔵した約50点からなる婚礼道具の一部である。さらに実際の道具とともに、江戸時代の婚礼の様子を描いた浮世絵を鑑賞しながら、当時の美のよそおいへの思いや、美の知識を深める解説を行った。また、江戸時代に行われていた化粧は、「黒（お歯黒）」「赤（紅）」「白（白粉）」の3色に象徴されるが、この3色の化粧にちなんだ浮世絵を展示した。鉄漿（かね＝お歯黒）つけをする女性、外出先での化粧直しや鏡台を前に襟足の白粉のつき具合を確認する遊女、緑色に塗り重ねられた口紅の表現、朝の歯磨きなど、それぞれの浮世絵は、江戸時代の化粧の様子を生き生きと伝えてくれる。

〈Books（書籍）〉は、「婚礼」から連想を広げて婚礼にまつわる色や儀式、写真など8つのテーマで構成した。展示の直接的な関連書籍の紹介は行わずに、さらに発想を広げてほしいという意図で、その並び方は一見すると意外に思えるかもしれない。化粧文化が扱う主題は、心理学や社会学から芸術文化まで幅広い。その広さ、豊かさを〈Art〉と〈Books〉で実感いただけるように努めた。

2期「化粧のはじまり」

化粧の起源は古く、旧石器時代ともいわれている。古代の遺跡からは人々が実際に化粧をしていたことを示す痕跡や、数多くの化粧道具が発見されてきた。ポーラ文化研究所ではエジプトやギリシア、ローマなど古代文明の化粧道具を所蔵している。石や金属などで作られた化粧容器や鏡は、現代の私たちからみると素朴さ、ユーモラスさを感じるかもしれない。化粧の目的や役割、当時の化粧料を紹介しながら、現代とは違う美意識に注目する解説を行った。

古代エジプトの青銅製の鏡は、柄が人体像などを象った意匠が多いが、ポーラ文化研究所で所蔵している鏡も胸元に鳥を抱いた神像となっている。古代ギリシアのテラコッタ製のパレットには、かすかに金彩が残り、何らかの装飾が施されていたことが想像される。アラバスター（雪花石膏）製の化粧容器は器形こそ素朴だが、天然の縞柄を活かしたかのような様子は、身近な化粧道具に対する当時の美意識を感じさせる。

古い時代には、顔料を樹脂などと混ぜて化粧料としていたという記録が残る。プログラムの最後には、マラカイトやアンチモニーといった当時化粧料として使われていたとされる顔料の標本に触れる時間を設け、硬さや重さを体感する時間とした。

〈Books〉では、「起源」をキーワードに命を生み出す水、植物などの自然、祈りなどをテーマに書籍を紹介した。

3期「初化粧」

伝統的な社会の中では、成人、結婚、出産など、ライフステージが大きく変化するとき「初めて行う化粧」があった。さまざまな通過儀礼の中でも特に、江戸時代に既婚女性を象徴する化粧であった「剃り眉と丸髷」に焦点を当てて解説を行った。

国周による浮世絵《当勢三十二想 あたたまり相》は、赤ん坊をあやす母親を描いた浮世絵であ

る。そり落とした眉は「青眉（せいび）」と呼ばれ、青く描かれている。江戸時代、女性は結婚前後にお歯黒をし、出産すると眉を剃る習慣があった。婚前の娘は、剃刀で眉を整える。「眉は顔の額縁」といわれるように、顔の印象を大きく左右するため、眉を剃り落とすことには不安やためらいもあったことが想像される。

上流階級の女性たちは、儀礼にのっとり眉を剃り額高くに眉を描いた。江戸時代の礼法家・水島朴也による『化粧眉作口伝』などに、その記録が伝わる。

髪型も結婚前後で大きく変わった。未婚女性を象徴する島田髷は、髷の中ほどを元結（もとゆい）で絞るのが特徴である。なかでも襟足うしろに長く伸びた髷（たぼ）が特徴的な「春信風島田」や、左右に大きく鬢（びん）を張り出す「燈籠鬢島田髷」は、いかにも華やかで若々しい。一方、丸髷は既婚者が結った。若いうちは髪の色や張りが豊かなため、大きくふっくらとしていた髷が、年を重ねるにつれて小さくなっていった。江戸時代には、何百という髪型が生み出されたとされるが、既婚未婚や身分などによる制約も多かった。ライフステージと髪型については、楊洲周延による《時代かがみ》をパネル化し解説を行った。

〈Books〉ではよそおいの変化から発展させた「転換点」をキーワードに、さらに連想を広げて「Border」や「変態」など6つのテーマで書籍を紹介した。

（文責：富澤 洋子）